

昭和史論争の問題点

—メタヒストリー的な分析—

トリストラン・ブルネ

(パリ第7大学院生、東京外国語大学大学院留学生)

序 文

1955年の12月に、『昭和史』（旧版）という歴史の本が出版された。この本は、昭和時代が始まった1926年から、出版された年までの歴史を叙述して、十五年戦争を中心にした。この本の著者達は（遠山茂樹、藤原明、今井清一）、当時歴史学に重大な影響をあたえたマルクス主義者であり、。彼らが「関心をそそいだのは、なぜ私たち国民が、戦争にまきこまれ、おしながされたのか、なぜ国民の力でこれをふせぐことができなかつたのか、という点にあった」。『昭和史』は、マルクス主義者の歴史家が指摘した戦争の原因を、明白で読みやすいかたちにまとめたとも言える。その結果、この歴史の見方に反対する人の批判を受けた。最も有名になったのは、文学評論家の亀井勝一郎の批判である。

「この歴史には、人間がない」と言う指摘は、特に有名になった。

今日の発表で試みたいのは、この論争で進行した日本の歴史学のパラダイムの変化である。この変化は、歴史的な事実についてより、この歴史の物語的な要求の変化であって、メタヒストリー的な変化ではなかつたか、というのが私の仮説である。この論争には、色々な重要な側面がある（民主主義的な歴史、戦争責任の問題など）けれども、今日は、文体、それに歴史の科学性と説得力に関連する側面を強調したい。

I 論争の色々な問題点

1 科学的な歴史と戦争の叙述

『昭和史』の著者達は、戦争へのプロセスを明確な因果関係の構造を基礎として、描こうとしていた。彼らの叙述には、日本の支配階級（あるいは支配層ともいう）が、自分達の利益と権力を増大させるためには、中国を侵略し、帝国主義的な戦争と記述されている。この支配層という言葉は、天皇とその元老、それに軍の上層部や当時の財閥を経営した資本家などを含んでいる。言い換えれば、この歴史叙述で、支配層は、全ての戦争責任を背負っている。彼らの叙述には、本当の（資本の支配から開放された）民主主義を要求した「国民」（それは、被支配階級、とその前衛である日本共産党を示している）が、この支配層によってだまされて、戦争の被害を受けたかのようなのである。

つまり、この戦争の一番重要な原動力は、資本の増大であった（あるいは、唯物論のインフラストラクチャー）、と『昭和史』の著者が論じていた。世界的経済危機によって激しくなった経済競争の中に、日本の財閥は、原料と市場を獲得するために、「満州」（中国の東北部）の侵略を必要とした。

また、日本のファシズムの特徴を説明するために、当時日本の民主主義は不完全であったため、支配層は、ドイツとイタリアのファシズムと違って、自分の権力を選挙に基づく大衆の政党を中心とすることが出来なくて、日本の社会を貫いた一つの組織であった軍を中心としたファシズムであったと『昭和史』では論じている。

この論証は、かなり説得力があったと言える。それに加えて、『昭和史』の著者達は、50年代の始めから行っていた逆コースを指摘して、戦争を導いた支配層が政権にもどった、と言う理由を論述していた。

2 亀井の批判：個人と文体

亀井の批判は、この「階級闘争」に基づく叙述に見られない側面を指摘しようとしていた。「人間がない」と言うと、もちろん、この歴史の登場人物は、完全に描かれていないという意味であろう。左派であっても、右派であっても、この(個人の)人物の矛盾や心理学などへの論述が浅いからである。その上に、この時代全体を貫く感動も描かれていない、と亀井は論じている。例として挙げられるのは、中国人を劣等民族視したことである。当時の日本人の西洋に対する劣等感を反映して、中国侵略の無視できない一つの大きな原因であった、と彼が論じている。

それに、亀井は、『昭和史』(あるいは、全ての現代の歴史家)の文体も批判する。この文体について、「ある種の裁判記録に似ている。つまり典型的な官僚文章である」とも言う。それは、もちろん、30年代のロマン派の一人であった亀井の「美」に対しての要求であると言えりけれども、歴史の科学性を暗黙に否定し、そのマルクス主義者の歴史家のスタイルが基礎としている物語的な戦略の弱点を明らかにするとも言えるのではないかと私は考える。

亀井は、この「左派」の歴史家のイデオロギー的な歴史叙述も批判している。この歴史を、戦中の官学の歴史に比較する。たとえば、彼らの英雄的な日本共産党の叙述を批判する。つまり、亀井が含意するのは、この物語的な戦略と、その戦略に繋がるイデオロギー的なニュアンスなのではないか?この歴史を、裁判記録に比べられると、意識的であるかどうかわからないけれども、マルクス主義者の、評決のように閉鎖的な歴史叙述を批判しているとも思える。

それに比べると、亀井の歴史の見方は、抽象化されて、因果関係の外に存在するような「戦争」に、全ての戦争責任を背負わせるようである。「戦争そのものの性質上人間は残虐にならざるを得ない」と述べている。

遠山は、この批判に次のような答えを出した：

—分業による答え。歴史学は、文学ではなくて、文体の基準も違う。「美」に対しての文学者としての亀井の要求は、「歴史の科学的究明は不可能だという主張なのだから」、考慮することはできない、と遠山は言っている。

—歴史叙述の姿、それにその登場人物。遠山が主張するのは、文学と違って、歴史叙述が目指すのは、個人の特異性を強調することではなく、各々の個人の運命の「差にもかかわらず本質的に共通するものがどこにあるか、それを天皇制の性格とその矛盾の発展においてつきとめ、記述することを第一義とする。」

もちろん、この色々な批判の裏には、文学と歴史学の社会学的な敵対のような関係が見えるといえるだろう。だけれども、この論争を分析して、日本史の叙述のパラダイムが揺さぶられる時期であったといえるかもしれない。特に、歴史家の物語的な戦略が変化し始める時期であったと思える。

II 論争のメタヒストリー的な分析

1—メタヒストリーとは何か？

「メタヒストリー」は、1973年に出版された本である。著者は、歴史家のハイデン・ホワイトである。この本のホワイトの説は、こうである。歴史の事実や真実の問題を別に、歴史の書き方の歴史を分析すれば、喩法に基づく色々な物語的な戦略とプロット化を指摘できる。つまり、彼は、歴史学の科学性の問題をもともと意識的に完全に無視している。この問題の外にも、歴史があると主張し、この文学的な歴史の側面にも、納得のいく戦略があると、彼が論証した。

歴史の場 (historical field) で見つける情報は本当かどうか、それは、彼の問題で

はない。しかし、この情報の扱い方、この情報の戦略的な物語化、各々の情報を一つの歴史に形成する時の喩法の使い方、とプロットの作り方を主張した。この物語化自身が、論証であると彼は主張している。それに、各々の喩法と、プロット、それに論証は、世界の見方、あるいはイデオロギー的な結果を含むと、彼は論じている。

喩法	プロット化	論証のモード	イデオロギー的な含意
隠喩	ロマン的	形式主義 (formist)	アナーキスト
提喩	悲劇	機械論 (mechanistic)	ラディカル
換喩	喜劇	有機物論 (organicist)	保守主義
アイロニー	風刺 (satire)	関連主義 (contextualist)	自由主義

2ー日本の歴史のパラダイムの変化の跡としての昭和史論争

遠山とマルクス主義者の歴史の場の見方：

登場人物：国民（言い換えれば、大衆とその前衛である日本共産党）、支配層（資本家、天皇とその元老、軍上層部、保守的政治家など）。歴史的な分野で見つけられる情報は、統計によって作られるカテゴリーを使って、読みやすい形に形成される。

歴史の場の構造：下部構造（あるいは資本、経済的にもとづく権力関係）によって形成される。唯物論によって前もって示される分野。経済学の方法論に基づいて、科学化された分野。

説明のやりかた：機械論的で「科学的」な論証に基づく「説明的な効果」(explicative effect)。

つまり、マルクス主義者の歴史家によると、歴史の場は、唯物論の法則（階級闘争、資本の構造的な影響→つまり、インフラストラクチャー）に構造化される。それは、機械論的、あるいは、因果関係を主張するような取り方である。その結果、世界の見方は、悲劇である：登場人物が、この因果関係の構造に抵抗しようとしていても、失敗する運命である。もちろん、喜劇的な革命の可能性も、その裏に存在するけど、昭和史には、かなり見えにくくなっている。

そのプロット化のイデオロギー的な含意は、ラディカルである。登場人物の行動力を無駄にする秩序を倒す必要があるという結論を含意する。

それより、この物語的な戦略は、二つの強さを持つ：

- 歴史学の専門家としての正統性を強調する。この歴史の場を形成する法則の鋭さと大切さを強調している。
- それに、このような歴史叙述の説得力は、かなり強いと思える。亀井が言ったように、裁判記録に似ているが、その結果、裁判と同様に、明確な評決を出して、明確な行動のガイドラインを与えていると思える。政治的に、一番役に立つような専門的な知識であると思われる。

逆に、弱点であるのは、この歴史的叙述の閉鎖性であろう。特に、現代史だったら、各々の読者の個人的な経験に合わない可能性もある。それは、なんの歴史叙述の問題でもあるけれども、この閉鎖性があるからこそ、それほどずれは受けにくく、その分、柔軟性

を欠いていた。

亀井の歴史の場の見方：

登場人物：個人、「典型的な人物」、英雄

歴史の場の構造：「邂逅」 歴史の場は、偶然に典型的な人物と出会う経験の舞台である。「死者の音が響く」場所。

説明のやりかた：状況の重要性を主張する。戦争という状況に関して、この叙述の美は、感動による説得力を持つのである。

亀井の歴史の場の取り方は、そういう風である：「史上において典型的な人物といわれる人と邂逅し、新しい倫理背骨を形成する上での根拠を発見しようとする要求である」。つまり、彼によつては、歴史の場は、邂逅の場であり、偶然の場でもないといけないうちにみえる。かれは、「典型的な人物」を歴史叙述の中心にして、「形式主義」的であるといえるだろう。(ホワイトが、この論証のタイプを19世紀のアナーキストに繋がるが、20世紀のファシストにも繋がることを主張する)

でも彼の戦略は、特に、彼の状況に対しての強調と、その状況に指定されてる人物の反動を美化する方向は、確かに「有機体論」に近づいて、保守主義的なイデオロギーにも関連すると言えよう。

この歴史叙述は、科学としての正当性が弱いけれども、感動力は高く、人の個人としての経験につながりやすいのである。その結果、メディアによって使われ安くて、市場に高い評価を持つ歴史叙述である。歴史書説というジャンルにつながりやすいスタイルであろう。

結 論

「昭和史論争」は、完全な結論に至ることはなかった。両方は、不和を認めて、自分の事業を続けたようだとと言える。それは、亀井の批判は、弱かったからであろう。彼の政治的な位置は、曖昧であり、歴史学に対しての正統性も全然なかった。その結果、いまでも、亀井の説に完全に賛成することは、歴史家として出来ないことであろう。

しかし、この論争の「物語論」に関する側面は、歴史学に最も影響を与えた側面なのではないか？ある程度で、亀井は、マルクス主義者の主張した「科学性」の裏にある物語的な戦略を明らかにして、歴史の場の他の取り方も可能であると主張した。もちろん、亀井のスタイルにも、戦略があった。それに、その戦略は、戦争責任を否定するための道具にもなり得た。亀井自身は、自分の過去を直面することを避けたので、この「無責任な歴史」の可能性が開けたとも言えるかもしれない。けれども、亀井の個人的意見と戦略に反対したとしても、硬すぎる当時の歴史学の彼が指摘した隙間は、確かに日本の歴史家や思想家に影響を与えたと思える。

例えば、1964年に初稿が書かれた色川大吉の『明治精神史』の序文に、このような著者の要求が読める。「私は、本書の読者を現代日本の青年たちに期待している。現代の困難な状況に直面しているかれらに、三代前の、同じ歴史の激動期を生き抜いた明治の青年たちの生き方を見てもらいたいのである。」こういうような歴史の場の扱い方には、「邂逅」、それに個人の登場人物に基づくような物語を中心とすることがわかる。それは、この「昭和史論争」の裏に進行したパラダイムの変化の跡なのではないか？